http://decfamily.p1.bindsite.jp/2017/

We 25R

No.251　17/07/14

迎え火

昨日はお盆の「迎え火」であった。諸君のご家庭でも迎え火をやっているだろうか？…と疑問を呈しても、そもそも迎え火を知らない人もいるに違いない。あるサイトには次のようにある。

＊

先祖の霊をお迎えするのが迎え火、送るのが送り火です。迎え火は先祖の霊が帰ってくるときの目印になり、送り火は私たちがしっかりと見送っているという証になります。

迎え火は家の門口や玄関で行う場合もあれば、お墓で行う地域もあるなど、その形態はさまざまです。一般には、家の門口や玄関で、焙烙(ほうろく)という素焼きのお皿の上でオガラを焚いて、先祖の霊を迎えます。

お墓で行う場合は、お墓参りをしたあと、お迎え用の提灯に明かりを灯して、その明かりと共に先祖の霊を家まで導いて帰ります。また先祖の霊は、盆提灯の明かりを目印にして家に帰ってくるといわれています。ですから、お盆には必ず盆提灯を飾ります。

迎え火は７月13日（８月13日)、送り火は７月16日(８月16日)に行うのが一般的です。13日の夕方、家の門口や玄関で、素焼きの焙烙(ほうろく)にオガラを折って積み重ね、火をつけて燃やし、迎え火として先祖の霊を迎えます。オガラを燃やしたその煙に乗って、先祖の霊が家に帰ってくるともいわれています。焙烙(ほうろく)は仏壇店で、オガラはスーパーや花屋さんで購入できますので、事前に準備をしておくことが大切です。

16日の夕方には再び同じ場所で、焙烙にオガラを折って積み重ね、火をつけて燃やし、送り火として先祖の霊を送り出します。京都の有名な大文字焼きも送り火のひとつです。

マンションなどの共同住宅の場合、玄関先やベランダで実際に火を焚くことは難しいものです。その場合は盆提灯が迎え火・送り火の役割となります。先祖の霊は、盆提灯の明かりを目印にして家に帰ってくるともいわれています。

＊

我が家では、このお盆の期間、仏壇には果物などのほかに、母がキュウリとナスにオガラを挿して馬と牛に見立てたお供え物を飾り、迎え火をして祖霊をお迎えしたあとは、家族みんなでその仏壇にお参りすることになっている（ついでに一杯飲んだりする…笑)。

ちなみにキュウリでつくるのは「精霊馬」、ナスの方は「精霊牛」という。祖霊が家に帰ってくる時は、素早く帰ってきてほしいので足の速い馬に乗ってもらい、逆にあの世へ帰って行く時は、少しでもゆっくり帰ってほしいので、歩みの遅い牛を用意するのだそうだ。なかなか味わい深い話のような気もする。

と、えらそうにうんちくを垂れた割には、昨日が迎え火であることをすっかり忘れて夜に仕事の予定を入れてしまって主人に叱られるし、母の家（私の家に隣に建っている実家）には仏壇があるが、私の家には仏壇もないのである。

合理的でない規範から自由になるのが近代化のイデオロギーではあるが、こういった家族の思いを大切に振り返るような伝統は、出来る範囲で大切にしていきたいものである（…というわけで引用も長いが、こういう知識も頭も片隅に置いておこう)。